

## [エッセイ]

マイスター・エックハルトから高村光太郎まで

石塚茂清

比較文明文化専攻の科目を担当して、様々なテーマを扱った。比較文化学原論では、ドイツ中世のマイスター・エックハルトの神秘思想を取り上げ、シュヴァイツァーの『生命への畏敬』、フロイスの『ヨーロッパ文化と日本文化』等を教材とした。フロイスの本を読んだ時には、タイ、ベトナム、中国、韓国からの留学生も受講していたので、各国の文化について話し合い、「文化の多様性」を実感し、良い勉強になった。講義では学期ごとにテーマを変え、定評のある古典を読み、独自に作成したプリント教材を使った。

大学院の講義では、「以経説経」の教えを実践すべく、ドイツ文字で印刷された書物やドイツ中世の美しい手写本も用いた。エックハルト関係の貴重なドイツ書を我妻和男先生に見せて戴き、興味深い話を伺ったのは良き思い出である。着任当初に取り上げた新井白石の『西洋紀聞』や福沢諭吉の『西洋事情』は、伊東俊太郎先生から「良い本を選んだね」と言われ、院生たちと読み込んで、やはり名著と感じ入った。新渡戸稲造の『武士道』を読み、騎士道の徳目との比較も扱った。岡倉天心とタゴールの著作に触れ、柳宗悦の民藝運動は何度も取り上げた。民藝の関連で、廣池千九郎記念館にある棟方志功の「文殊菩薩、普賢菩薩」等を院生たちと見学し、感動を共にできたのは幸いであった。

比較文学研究の講義では、私の専門である『ニーベルンゲンの歌』（ドイツ中世の英雄叙事詩）とミンネザングの他に、万葉集や芭蕉の『おくの細道』の一部を日独両語で読んだ。比較文学の授業で学生たちが最も興味を示したのは、日独英の3ヶ国語で読み比べた川端康成の『伊豆の踊子』とその映画で、受講した留学生たちは優れた感想を書いてくれた。

学部の「西洋文化入門」では、多人数のため座席を指定し、毎回小テストをし、自主研究レポートを課し、2種類の期末試験を実施した。私自身がヨーロッパで実際に見た文化遺産について話し、ケルト文化やギリシア神話を扱い、貴重本を見せたりした。この授業には、凡そ150名前後の受講生がいて、無欠席の学生が多く、感心なことであった。

私は筑波大学に1974年から31年ほど勤め、その間の30歳代初めから小学館の独和辞典編纂に十数年携わり、幸いにも学界を代表する岩崎英二郎先生や橋本郁雄先生のご指導を受けることができた。科研費等の経費で、1977年以降にドイツ語圏の他に北欧のオスロやウプサラ、イタリアやハンガリー等の叙事詩関係諸都市を何度か巡り歩き、その見聞を筑波大学と、丁度10年勤めた麗澤大学の授業やゼミで活かすように努めてきた。

麗澤大学に於いて、以上のような教育と研究ができたのは、我が身の幸いであり、廣池幹堂理事長、中山理学長を初めとする学園の皆さまに心から篤く御礼申し上げます。

「心はいつでも あたらしく 毎日何かしらを 発見する」(高村光太郎)